シリーズ 城

特許審査第二部繊維包装機械　山本 忠博

第十三回　これが戦国期の山城だ

～後北条氏の対豊臣作戦の要・山中城の場合～

皆さんは、戦国期の城と言うと、どのようなイメージをお持ちでしょうか。高く積み上げられた石垣、水を湛えて人を寄せ付けない堀、そびえ立つ天守と言ったところでしょうか。確かに、時期と地域を限定すれば、そのイメージは間違っていませんが、武田氏、上杉氏、後北条氏等の有力戦国大名が覇を争っていた時期における多くの（少なくとも東日本の）城の構造は、そのイメージとはかなり異なっています。

今回は、箱根の西の入口にある山中城を紹介しながら、群雄割拠の戦国時代真っ直中の城について書いてみたいと思います。

はじめに山中城とは

東海道と箱根の関所を城内に取り込んだ山中城は、豊臣秀吉による小田原攻め（1590年）に備えて、関東の北条氏政、氏直父子（後北条氏）が、先代氏康の築いた山城を増築、改修したものです。この時の後北条氏の基本戦略は、西から来襲するであろう豊臣本軍を箱根方面で消耗させ、小田原の本城で長期戦に持ち込むと言うもので、箱根方面と小田原への兵力の二点集中が柱でした。そのため、箱根方面の山中城の増築、改修は、後北条氏の持てる築城術を惜しみなく投入したものになりました。また、小田原攻めは、秀吉による天下統一の総仕上げで、実質的な群雄割拠の時代の終焉に当たるため、山中城はその時代における一つの最終形態と言うことができます。

山中城の構造（陣地防衛のための様々な工夫）

東西の城の特徴を端的に表すと、“西は石垣、東は縄張”と言うことができます。西日本の城は、比較的早くから石垣が発達し、織田信長の安土城等で壮麗な石垣が出現しました。これに対して、中世の東日本の城では石垣を用いることは稀で、代わりに堀や土塁で囲った曲輪（防衛陣地）を緻密に組み合わせる“縄張”（築城にあたっての基本設計）が発達しました。

山中城も東の城らしく、いくつもの曲輪を組合せて、その周囲に堀と土塁を複雑に配置しています。ここからは、山中城の特徴的な部分を挙げて、その陣地防衛のための工夫を見ていきましょう。

曲輪　堀や土塁で囲んで周囲から隔離した防衛陣地を曲輪（くるわ）と言います。山中城の曲輪は、現在、名称が付いているものだけで、本丸、二ノ丸、三ノ丸、北ノ丸、

二ノ丸の虎口（入口）の木橋

西ノ丸、西櫓、元西櫓、御馬場曲輪、岱崎曲輪、擂鉢曲輪の10個があります。各曲輪は堀や土塁で仕切られ、相互の連絡は土橋又は木橋で行われました。重要な虎口（曲輪の入口）には、木橋を用い、隣接する曲輪が敵に渡った場合には、木橋を落とすか引き入れて連絡を絶ちました。

土塁　曲輪の周囲には、土塁が回らされています。現在は表面が芝で保護されていますが、戦国の当時は、表面に粘土質のローム層がむき出しになっていたため、非常に滑りやすくなっていました。土塁というと、石垣よりも防衛力が劣るように思われるでしょうが、石垣は、石の隙間が手掛かり足掛かりになって意外と登り易いのに対して、土塁は、武器を持った鎧武者では、まず這い上がることができません。

堀　堀は基本的に空堀です。特筆すべきは、堀内に畝（土手）を設けて区画を作っていることで、この区画毎に湧水又は雨水が溜まるようにしてあります。この堀を、畝堀、堀障子（畝堀の発展形で障子の桟のように畝がはしるもの）と言います。敵は畝（土手）上を渡らされるので自ずと一列に並ぶことになって、城方は攻撃目標を絞ることができました。誤って区画内に落ちた敵は周囲の畝（土手）に遮られて主要武器の長槍が使えません。さらに、溜まった水で区画内は泥濘となり、ほぼ脱出不可能となりました。言わば、蟻地獄です。なお、溜まった水は、平時においては生活用水になりました。

岱崎出丸の土塁と畝堀

西ノ丸の堀障子

山中城の落城

後北条氏の精鋭4千で守りを固めた山中城でしたが、豊臣軍7万（諸説あり）の猛攻に曝されてわずか半日で落城しました。17倍以上の寄せ手を前に衆寡敵せずと言ったところですが、自慢の堀や土塁も敵を引き寄せて初めて効果を発揮するわけで、大量の鉄砲を主体とした遠距離攻撃には為す術がなかったとも言えるでしょう。

小田原攻めの後、城は、それまでの空堀と土塁を主体とした構造から、水堀、石垣、分厚い塀を主体とした対鉄砲用の工夫を駆使した近世城郭へと、本格的に移行していくことになります。

現在の山中城

芦ノ湖の南、箱根峠の西の、国道1号線沿いに位置しています。1930年に国の史跡に指定され、1973年から静岡県三島市による学術的な調査と整備が行われて、中世の築城技術が良く復元されています。

建築物がないため、いたって地味な城跡ではありますが、土塁と空堀を回らせた戦国期の城に興味のある方は、是非一度訪れてみることをお奨めします。箱根旧街道（東海道の一部）の石畳とともに、ハイキング気分で歩いてみてはいかがでしょうか。

箱根旧街道